



詩篇全体の流れをつかむ

詩篇通読 その前に

詩篇通読 その前に・・・

神の約束の祝福と、民の感謝と賛美による応答

「主は岩、主のみわざは完全、まことに主の道はみな正しい。主は真実な神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」
申命記 32章4節

「幸いなイスラエルよ、だれがあなたのような、主に救われた民であろうか。主はあなたを助ける者、あなたの勝利の戦。敵はあなたに屈し、あなたは彼らの背を踏みつける。」
申命記 33章29節

「ダビデはソロモンに言った。「わが子よ。私は、わが神、主の御名のために宮を建てた志を持ち続けてきた。しかし、私に次のような主のことがあった。「あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたがわたしの名のために家を建ててはならない。わたしの前に多くの血を地に流してきたからである。見よ、あなたに一人の男の子が生まれる。彼は穏やかな人となり、わたしは周りのすべての敵から守って彼に安息を与える。彼の名がソロモンと呼ばれるのはそのためである。彼の世に、わたしはイスラエルに平和と幸福を与える。彼がわたしの名のために家を建て、彼はわたしの子となり、わたしは彼の父となる。わたしは彼の王座をイスラエルの上にこしえに堅く立てる。」」
歴代誌 第一 22章7-10節



「これが、あなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。あなたの名は、もはや、アブラムとは呼ばれない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしがあなたを多くの国民の父とするからである。わたしは、あなたをますます子孫に留め、あなたをいくつもの国民とする。わたしが、あなたから出てくるだろう。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。わたしは、あなたの寄留の地、カナンの全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる。」
創世記 17章4-8節

「あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。」
レビ記 26章12節

「それから、レビ人の中のある者たちを任命して主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、主に向かってその御名を呼び、告白し、賛美するようにした。」
歴代誌 第一 16章4節
「その日、その時、初めてダビデはアサフとその兄弟たちを任命して、このように主に感謝をささげさせた。」
歴代誌 第一 16章7節

詩篇。詩篇は聖書の中で最も長い書物の一つです。150篇あるのです。詩篇1篇、2篇、3篇、150篇収録されています。ずっと昔から今に至るまで、何千年にもわたって信仰者の最も愛している書物の一つですね。皆さんそれぞれ自分の好きな詩篇というものがあつたり、共に泣いて共に喜んで、励まされて教えられる魂の友のようなものです。

改めて1篇、2篇、3篇、この順番に読んでみてください。前後関係で見えていくと、隣の詩篇と似ているものもあるのですが、急に話が変わったりして、どういう順番で並んでるんだろうか、よく見えてきませんよね。並んでいる順番に意味があるのかということも言えると思います。全体が五つの巻物に分かれています。順を追って編集されたものだということが分かるかと思うのですが、こんなところに、使徒行伝の13章にピシデアのアンテオケいうところでパウロが奨励の言葉を言う。その中に「詩篇の第2篇に書いてある通りに」という言い方をして引用していますから、詩篇の第2篇というのは、パウロの時にもすでに順番として2番目にある詩篇ということは、編集されたものとしてあることが分かると思います。

いろいろな時代なんですね。ダビデによるというものがたくさんありますし、題が書かれていないものもたくさんあります。モーセが書いたというものもあります。これは新改訳ですけど、題自体は小さい字で書いてあるのです。これは本文じゃなくて、古くからあるものなので、ここに題というようにしています。この題を見て著者が誰だということ、ある程度かたまりとして、ダビデの詩篇が続いているねというようなこ

とは分かるのですが、どうも書いた人順にまとめられたものではないですね。それと時代順に時間を追って、例えばダビデの人生を追って書いたものでも、編集されたものでもないようです。使用目的、礼拝の順序に従ってまとめられているということでもないようです。後はジャンルですね。嘆きの詩篇、賛美の詩篇、何か祈禱書のように、こういう状況の時に使ってくださいねという事が配列されているのもないようなのです。

この配列に意図があるのではないかとということを研究するようになったのは、ここ何十年のようです。何百年前からこの配列はこういう意味ですよということが分析されていたわけではなくて、だんだん研究していくと、何かの繋がりがあって、編集意図があるのだろうけれども、なかなか見えてこないというのが、神学者たちが研究しているところです。

私達も何か一貫しているテーマがあるんじゃないかということで、ずっと詩篇を学んで見ていたのですが、なかなか見えてきませんでした。ただ119篇を見ると、119篇は長いんですね。176節あります。この同じような事を176回言ってくれるのですが、「みことばを愛します」「みことばを愛します」という繰り返しのようには見えるのですが、何かその形があるはずだという事を探ったりしていました。

基本的には「並行法」と言われるのが詩篇の順番ですが、その中でアブラハムの約束、ダビデの契約、こういうものが約束の応答として、もしくは約束の説明としてまとめられてるのではないかと見ていくようになりました。

それで出てきた形がこの5つの巻物です。それぞれの巻物の1篇から最初の巻物の終わりの41篇「ほむべきかな イスラエルの神 主。とこしえからとこしえまで。アーメン、アーメン。」(2巻の終わり72篇も)「とこしえにほむべきかな、その栄光の御名。その栄光は地に満ちわたれ。アーメン、アーメン。」「ほむべきかな神」から始まりですね。3巻の終わり(89篇)も「ほむべきかな主 とこしえまでも。アーメン、アーメン。」4巻の終わり(106篇)「ほむべきかなイスラエルの神、主アーメンと言え。」ということで、4つ目。そして最後の5つ目(150篇)も最後はハレルヤでアーメンが長いような感じですね。「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」と言ってるような終わり方をします。

5つの巻物に分かれているということで、5つが同じ方向を向いているとずっと思ってたのですが、最初の4つと5つ目が対になってるような形ということで、1、2、3、4巻。それに対して5巻という形ではないかと見るようになりました。

1巻、2巻、3巻、4巻。ここで1巻は、「主は王であること」。2巻は「子が王となること」。3巻は「神様の家」。4巻は「民が神様の家であると住まいである」。王、王、家、家という繋がりでですね。それに対して第5巻は、1巻から4巻の神様に対して、私はこのような神であるという約束ですね。約束を果たしてくださるので、5巻でその約束に対して応答する。「主に感謝せよ」「主は良い方」「その恵みはとこしえまで」「ハレルヤ」という構成で、こちら側(5巻)の応答が成り立っているのではないかとということです。

第5巻は4つに分けられます。107から118が第1集。119は1つの詩集(第2集)です。1篇というよりは22個集まっている詩集。120から134は都上りの詩篇と題がついていますけれども、これが第3集。135から150が最後の第4集ということで、こちらも4つに分かれている。上の1巻から4巻「私はあなたの神となる」この約束が成就すると、それに対して「あなたはわたしの民となった」という民の応答。神様の約束と民の応答、これで愛の一致が表されているという構造になっているのだろうと。

「私はあなたがたの神となる」「あなたがたはわたしの民となる」。これはレビ記26章に書いてあったり、他にも何度か出てきますけれども、契約の愛の一致を表す言い方ですね。結婚式の時の、「私はあなたの夫です」「あなたは私の妻です」という結婚の誓いの言い方に似ていますね。愛の位一致を表す言い方として、「あなたの神となり私の民となる」ということが、大きな枠組みとしてここにあります。

「主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い、その恵みはとこしえまで」という民の応答の言い方は、ダビデが天幕を作って契約の箱、神様の足台、神様の王座が戻って安置されたと言った時に、レビ人たちの中からうた歌いたちを選んで命じて賛美するようにしました。その時の感謝の歌の要約の様なものです。「主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い」この「主はまことにいつくしみ深い」の「いつくしみ深い」は「良い」という言葉ですので、ここ(第2集)は「主は良き方」と書いてあります。第1歴代誌の16章がその箇所になります。その時に歌を歌わせました。「主に感謝して御名を呼び求めよ」というところから105編に引用されている。ところで96編が真ん中であって、106編がまた最後に少し頭とお尻のところがあるように、そのような形の歌がここに記録されているのですけれども、「主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い、その恵みはとこしえまで」その言葉を使って、「まことに主の恵みはとこしえまで」と民は応答するわけです。

このハレルヤ、ハレルヤ、主をほめたたえる。そして、そのまことがとこしえまでというハレルヤ、アーメンということを少し長く言ってるような感じですね。この言い方に沿って民の応答側の第5巻が構成されているというのが、私たちの分析になります。

「主は岩なる王である」これはアブラハムも、アブラハムに誓われてモーセの時代に実現していく。特に、主は王であるこの岩であるというのは、モーセの歌、申命記32章のモーセの歌の出だしのところにありますね。「主は岩。主のみわざは完全。まことに主の道は正しい。主は真実の神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」この出だしから始まる32章は、非常に大切な申命記の最後に記録されている歌です。この「主は岩」という言い方を使って、ダビデは18篇を書いたりします。ダビデも、ダビデの人生の最後のところ、第2サムエルの最後のところに、その18篇になっている箇所が記録されています。「主は岩である」という詩篇ですね。

それと「幸いな者よ」。詩篇は「幸いな者よ」で始まりますね。「幸いな者よ」山上の説教の出だしと同じです。「幸いな者よ」というのが詩篇の中に何度か出てきます。その幸いな者よという言い方の最初は、申命記の次の33章、「幸いな民よ、イスラエル」「幸いな民よ、イスラエル」というところが最初になっています。このアブラハムに約束されて、偉大な国民になる。そして、その土地、約束の地が与えられると約束してくださったことが、モーセの時代に、いよいよ約束の地に入って、大きな国民になっていくというところで一度成就していますので、そのことを特に教えている。1篇から41篇までの第1巻です。

第2巻は「子が王となる」と書いてありますね。ダビデに約束して、そのダビデの子が家を建てる。そしてその王座は限りないという約束をしてくださいました。その約束のとおりソロモンが王座に着くわけです。その42篇から72篇。72篇は「ソロモンによる」とか「ソロモンのために」という題がついていたりするように、72篇を読めばソロモンのことがすぐに思い出せるような詩篇ですけども、そこがクライマックスになって、ダビデの子孫が王座に着くということが、この第2巻のテーマになっています。

そして、その子は神様の家を建てました。ソロモンは神殿を建てました。第3巻の73篇から89篇は、特にダビデに誓った誓いを果たすということがそのテーマですが、73篇から89篇の中は、神殿の大切な宝、そのことを表すような構成になっています。

第4巻は、もう1度今度アブラハムに戻りますね。アブラハムに戻って、アブラハムとモーセ。この約束は偉大な国民ということでした。90篇から106篇までですが、100篇を見てみましょうか。「全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。」「感謝のいけにえ」というタイトルの付いてるこの詩篇ですね。「主こそ神。主が私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。」この詩篇の最後、「主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」。神様の民、主の牧場の羊、これが神様が創った神様が共にいてくださる、神様が住んでくださる民。これが偉大な国民、主が共にいる知恵のある民ということですね。そのことを表している第4巻。第4巻90篇は、モーセの歌から始まっています。

それで、見てみると、「王、王、家、家」。「かしらと体」のような感じですね。そしてアブラハム、モーセの約束、ダビデ、ソロモンの約束が、成就するよと。この事が成就するなら、私はあなたの神であるということが明らかにされる。これが明らかにされたら、「私たちあなたの民は、主に感謝して、主は良い。」その教えですね。教えは祝福です。それでその恵みがとこしえハレルヤ。これはイスラエルの三大祭りのそれぞれの祝福を表しているように見えます。過ぎ越しの祭り、エジプトから出る。脱出するハレルヤですね。そして7週の祭り。シナイ山で律法が与えられた。そのことを喜ぶ7週の祭り。良い教えですね。そして3番目は、荒野を歩く中で、主は共にいて、その恵みを絶対に捨てませんでした。それで最後に、その神様の導きによって本物の平安、仮庵の祭りで「ハレルヤ、アーメン」と賛美を捧げるというこの約束のストーリーの順番にも、この4集が構成されているということで、詩篇全体が神様の約束必ず誓った約束を果たしてくださるという「愛」、その約束が果たされたことに対する「感謝と賛美」ということがこの詩篇全体の配列編集の意図だということです。

それぞれ、この1巻、2巻、3巻、4巻、そのそれぞれの中をどういう順番で配列されているのか見ていくと、もっとこの「主は岩なる王」という意味はどういう意味なんだろうかということが具体的に示されていくものです。例えば、これが第1巻ですね。第1巻の1、2、3、4、5、6、7。これで一つのまとまり。8から11までで一つのまとまり。この1から11までがまた一つのまとまりになって、19から31、12から18、32から41と比べて表現されていると。119篇も22段落ありますから、その22段落がどういう構成になっているのかということが分かるようにこの表があります。この表に従って、1年間で詩篇を全部さぐっていくということをするには、この1篇から150篇を52週で分けるわけですね。52週でこの区分に従って分けた通読表の分類がここに 있습니다。この形、このフォーメーション、並べている配列編集になるべく即した形で1週間で読む箇所というのが、ここに提示されていますので、最初は、1篇から7篇。第2週は8篇から11篇という形で見て行くと、150篇まで52回で見ることが出来ますという通読表です。その順番に従って1週間にこの1集ずつ、第1巻の題、呼び方をねなんて呼べばいいのかまだ決めてないですけども、1から7までの集。8から11までの第1集の第1巻？何て呼べばいいでしょう。それも決めていきたいと思いますが、1篇から7篇までのひとつのまとまりということから始めて、1年で最後まで読めればと思っています。